研究

森　聚のことについて

会員　佐脇　貫一

森聚、といっても知る人は少ないが、扶摇公子といえば書詩に興のある人であれば知っている。『佐伯市史』の「佐伯人物志」には、次のように記述してある。

扶摇公子の号で知られる森聚は、佐伯藩主毛利高慶（源林公）の八男、幼名を源十郎、後浪江と改めた。享保十五年十月十七日、佐伯城内で生れたが、生母集井氏（側室志敏子）は出産後死亡した。（同書七八ページ）

（古老物語）　享保十五庚戌年十月十七日、酉下刻、源十郎様御誕生。御母は於志敏の方にて即刻死去なさる。法名智覚院最誉寿心大姉といふ。翌年正月、浄修堂（廟谷寺）の側なる塀を壊て霊屋となし再葬す。この方は奥井春沢の娘にて喜斜の妹なり。三月右墓所迄に石塔を改めて、浄修堂の右側に築く。（向って左側、法名は智覚院殿最誉慈仙寿心大姉、享保十五庚戌歳十月十七日）

（鶴藩略史）　元文三年二月十二日、公（高慶）入津浦山に猟す。源十郎従ふ。年齢漸く八歳、銃を善くし、自ら射て二鹿を斃す。

高慶が没した寛保三年ごろ、源十郎は十三歳で佐伯城内に居住したが「佐伯の士は騎射・剣・槍・銃等の技を学ぶ」とあるから、尚武の風の盛んだった佐伯藩で、斯道に錬達した藩士から、これらの技を学んだものであろう。（当時の家老黒木実応は鉄砲の名手で、いわゆる御家流の継承者であった。）

源十郎が浪江と改名した時期もわからないが、三河の岳融という者の書いた森聚の碑文に、

廿七歳始めて東都に来り……」

とあるというから一応二十七歳のとき、宝暦七年ごろ江戸に上ったのであろう。（源十郎改め浪江は、おそらく元服時の改名であろう。）

（鶴藩略史）　宝暦七年四月六日　浪江（源林公第八子）兵庫頭山野辺義亀（水戸老臣）の養子となり、名を義方と改む。（改めて図書と称す。）

森浪江は江戸に行く前、京坂の地に学んだかではなかろうか、というのは佐伯市史に「また服部南郭（京都の人、徂徠門）にも師事した」とあるからで、服部南郭は荻生徂徠の弟子でも太宰春台に次ぐ先輩弟子、育名な漢詩常山や四海随一の碩儒荘田子謙が学んだ大儒である。

これは私の想像だが、森浪江には江戸進学の希望があるのを知った服部南郭は、相弟子の宇佐美子遊、大内熊耳、高野蘭亭らを紹介した。浪江が、とくに大内熊耳の薫陶をうけたことは古学派徂徠門の系譜に、熊耳の門弟として大内蘭室、立原翠軒らと共に、毛利扶摇の名が載せられていることでわかる。

安永六年七月、山野辺義方は離縁して山野辺家を去り、佐伯藩江戸白銀支邸に帰り森氏に復した。これより名を改めて森聚と称したが、彼は山野辺家にあることと二十年、大いに楽書を学び、音曲の技に長じた。とくに吹笙（笙を吹くこと）が得意であったという。

扶摇公子というのは、森聚が扶摇子と号したからで、ほかに壺邱・南豊などの号がある。聚は実名で、

字は公錦、通称は図書である。秋橋公子一代の事蹟は臺郎詩文集の他か、書籍考・楽律考・制度考など四十八部九十一巻におよぶという。

自殺文郎は帰ってから十年、天明六年七月十一日、五十七歳で同郎に没した。

（鶴藩略史）　天明六年七月、森繁費ず。大忠院と号す。江戸長応寺に葬る。詩稿臺印あり。（長応寺八六明）

龍鼎山養賢寺は毛利家の菩提寺である。この養賢寺にある毛利家墓地の西南隅にある一基の五輪塔に、三者の法名が刻んでがるという。右側「大忠院殿道清日義大居士」　中央「聞忠院殿玉岫覚圭童男」　左側「秋幻院殿日蓮大童子」

問題は右側の「大忠院殿道清日義大居士」で、「天明六丙午年七月十一日　毛利図書」となっている。さすれば、これは森繁の供養塔で、「聞忠院殿」は文政九丙戌六月二日毛利侍治郎」、「秋幻院殿」は安永八己亥年九月七日　森商之進」という二童子の法名と共に、文政以後江戸から移されたものであろう。（この供養塔の所在・法名については故河野與一氏の調査による。）森繁との関連については山本保氏の指示であるが、私が今もっとも疑問を感じているのは森繁と思われる毛利図書の法名で、まるで日蓮宗の戒名のようであることである。

なお森繁の生母於志幾の方は浄土宗（興井家の宗旨）であった。

過日私は、下関田地区宇山の白蓮庵にある興井師道の碑を見に行った。

興井師道は興井春沢のことであるが、この碑文は孫春耕が撰記したもの。興井氏が佐伯藩に仕えるようになった次第を記してがる。春沢（師道）は晩年を宇山に隠栖したが、そのころ白蓮庵は雲集山白蓮寺という一刹であった。

春沢は於志幾の方の父親、その孫に森繁ががり、興井寛ががることは偶然とはいえない。

（おわり）

史料

並河杢之助信吉

（加藤賢成「豊後遺事」による）

毛利養賢公、慶長六年防州ノ人益田八助ヲ召シテ禄五百石ヲ與ヘ、又丹州ノ人並河隠岐守信元ノ子孔助ヲ召シテ禄三百石ヲ與ヘ、並ニ家老トス。公ノ人才ヲ不次ニ擢用セルハ、皆此ノ類ナリ。

並河孔助後名ヲ筑後ト改ム。養賢公更ニ姓名ヲ賜ヒ、毛利杢之助信吉ト称ス。子孫相継デ毛利氏ニ事フ。八助名ヲ主殿ト改メ、後ニ禄ヲ増サレテ千石ニ至ル。

毛利松林公薨ズ。世子高尚僅ニ二歳ナリ。並河信吉之ヲ奉シ、封ヲ嗣ガン事ヲ幕府ニ請フ。森九郎左衛門曰ク、公子僅ニ二歳未ダ嗣ブ当カラズ、先公ノ弟次郎八君ヲ立ツベシト。信吉偽テ曰ク、公子既ニ三歳且ツ強健ナリ、宜シク立ツベシト。老臣ヲ撰ビ公子ヲ負ハシメ、老中酒井雅楽頭ニ謁リ請テ曰ク、世子成立此ノ如シ。然ルニ別ニ継嗣ヲ求ム、臣其故ヲ解セズ、ト。雅楽頭世子ノ嗣ブ事ヲ許ス。長州公ノ新ヲツギ成立ヲ得タルハ、実ニ信吉輔導ノカナリ。

佐伯藩初メ拝封二万石、後庶本堅田等十村ヲ割キ、森九郎左衛門ニ分與スルヲ以テ実ハ一万八千石ナリ。然ルニ並河信吉因リ幕府ニ請ヒ、田邑ヲ実検スレバ歳入二万石アリト称シ、遂ニ二万石ノ朱印ヲ得タリ。